

序

2011年に、日本リウマチ学会関節リウマチ超音波標準化小委員会の皆様方の多大なる努力により、「関節エコー撮像法ガイドライン」を世に出すことができました。

そのときの序文にも書きましたが、超音波標準化小委員会の最も重要なミッションの一つは「関節リウマチの診断および疾患活動性評価における関節エコー検査を用いた撮像方法および評価方法の標準化を図ること」です。本書の編纂は、その大切なミッションの続きであり、本書は「関節エコー撮像法ガイドライン」の姉妹編ともいいくべき位置づけのものです。

本書の意図しているところは、10頁の「本書の目的」の項をお読みいただければおわかりいただけます。本書の「関節エコーの評価」とは即ち「関節炎の重症度の評価（分類）」であり、客観的評価が最も難しい部分です。どのように記述すべきか随分討議を重ねましたが、結果的には「多くの委員の主観的判断に基づいて“多数決”で行う」というコンセンサスの基に「現時点での日本リウマチ学会の関節エコー評価のスタンダード」をこのようにつくり上げました。そう考えると、本書は「超音波標準化小委員会独自の判断によるガイドライン」とも誤解されかねませんが、皆様が実臨床での経験を重ね、本書に記載された「病変の重症度の評価」を参考に、個々の実地臨床で理解／納得していただくことが最も大切なことだと私どもは考えます。

臨床で既に関節エコーをお使いになっておられている皆様はとうに実感していると思いますが、もはや関節エコーなしのリウマチ診療はありません。循環器の専門医が心エコーの所見なしに循環器の診療ができないように、エコーというtoolを持っているリウマチ医は、関節エコー所見抜きにはリウマチの診療はできません。関節エコーの領域は、未だ発展途上であり解決しなければならない問題は数々ありますが、もはやエコー所見なしに「貴方の関節リウマチは活動性です」とも「もう良くなっています」とも、患者に伝えることはできないと申し上げても過言ではありません。

しかし、今後この「評価」を日常のリウマチ診療にどう取り入れて行くのか？即ち、どのような所見が残っていれば治療を変更すべきなのか？どのように所見が変化すれば（あるいはなくなれば）寛解といえるのか？臨床研究にどのように取り入れて行くのか？等々、未解決の問題はまだまだ残っております。繰り返しになりますが「関節所見を読むだけのエコー」ではなく、今後は「その所見から一体何がわかるのか？」「このリウマチはどのように治療をすべきなのか？」そして「どのようなエコー所見をもってして治癒というのか？」等々を本書を基に皆様で考えていただきたいと思います。

関節エコーを用いた数多くの新しい知見が日本から発信されることを、超音波標準化小委員会の一員とともに心から願っております。

2014年4月

日本リウマチ学会 関節リウマチ超音波標準化小委員会
委員長 小池隆夫